

「兵庫塚安産稲荷神社」 ～間引き図絵馬奉納の意図～

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

日本民俗学の生みの親である柳田國男が、民俗学を志すきっかけとなったのは、間引き図絵馬にあるという。十四歳の時、茨城県北相馬郡利根町の徳満寺で見たのである。出産直後の女が、鉢巻を締め生まれたばかりの嬰兒を押さえつけている絵図に、「その意味を私は子ども心に理解し寒いような心になった」と後年述懐している。

この柳田國男が見たと同じような絵馬が宇都宮市内にも存在する。その一つに兵庫塚稲荷神社の間引き図絵馬がある。どうしてこのような絵馬が奉納されたのであろうか。ぞっとする絵柄に、柳田國男ならずとも心に戦慄が走る。

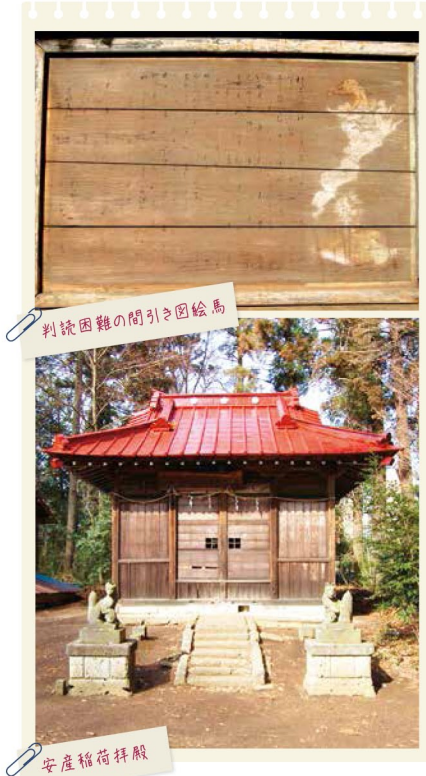
兵庫塚稲荷神社は、社伝によると、平安時代に創建されたといわれる。その後、八代城主宇都宮貞綱の本妻が難産の折、貞綱をはじめ家臣たちが当社に祈願したところ、無事男の子を出産した。そのことから京都

伏見稲荷より安産稲荷の号を賜た。以来、通称安産稲荷として近郷近在の人々から親しまれているという。

さて、間引き図絵馬である。現在は拝殿の中にあるが、もともとは拝殿の外側に掲げられていたものと思われる。というのも風雨にさらされたように、全体に傷みが激しく文字や図柄が判読しづらくなっている。大きさは高さ約一〇〇センチ、幅約一五〇センチほどのもので、右側三分の一に絵が、残りの部分に間引きを戒める文章が墨書されている。絵柄は女の人が嬰兒を押さえつけ、嬰兒のところからでた細い雲が上の方で広がり、その上に狐に乗った地藏尊が下を見ているものである。墨書について、その一部を紹介しよう。

らずや、その子が己が喰う猫にひとしく、その心の様を描き、いましめの便りあらしめんと書きつらね侍る。此のおんかみをたのむ人々、耳目のおよぶ所に其愁いあらば、はやくもいさめ導引、神の本意にあづかるべし」

この絵馬は、文政九（一八二六）年二月初午に、兵庫塚村名主今泉元兵衛が奉納したものである。栃木県内では文化四（一八〇七）年から天保七（一八三六）年の間に飢饉が二十二回にもおよび半ば慢性化した。経済的に苦しいばかりでなく食糧難に陥った人々は、せつかく授かった命にもかかわらず、人減らしのために、やむなく間引きや墮胎を行うに至ったのである。間引きや墮胎が横行すれば、生産年齢層の人口減少は必至であり、やがてはその地の経済活動も衰退する。兵庫塚村でも間引きや墮胎が横行していたのであろう。村を束ねる名主とすれば看過できないものである。そこで安産祈願等の参詣者で賑わう安産稲荷神社は、間引きや墮胎を戒めるための格好な場所として奉納したのであろう。それも拝殿内部ではなく、柳田國男が布川の徳満寺でみた間引き図絵馬とおなじように、一番人目につきやすい拝殿外側に掲げたものと思われるのである。



判読困難の間引き図絵馬

安産稲荷拝殿

江戸時代約二百六十年間の日本の人口は、ほぼ三千万人で横ばい状態であった。人口が急激に増加するのは明治期になってからである。